

儒家文化と中国教育の現代化について

瀬尾 邦雄

辺 冬梅

要旨

本稿は国立鶴岡工業高等専門学校国語科瀬尾邦雄と中国河南省鄭州市の中原工学院講師辺冬梅との共同研究である。辺冬梅は本校と中原工学院との学術交流協定に則り日中比較文化研究のために来学したもので、昨年三月から九月までの半年間滞在した。この学術交流は一九九八年十一月に締結され現在までに鶴岡高専から十六名、中原工学院から十名の教員が派遣され日中の学術交流に貢献してきた。不肖も昨秋、交流の機会に恵まれ儒教受容史講座を担当したが、辺冬梅は不肖の交換要員として来学したものである。

本論においては現代中国が旧弊の故に安易に排除した儒家的教育論を再検証し、現代中国人の根底に存在して中国人の思考と行動を決定づけている儒家思想の功罪を論じ、更にそれらの思想が現代中国の教育においても必要不可欠であることを論じたものである。

儒家思想の根本は倫理道德にあり、就中、その根源は「仁」に在り、それを礼で纏め、この両者の実践成果を「治國平天下」で表出するというものである。しかし、この儒家思想が中国的停滞を生んだのも歴史的事実であり、排除されるべき最大のものである。しかし、現代中国の教育改革を行う上で、人間的視点を失つてしまえば画竜点睛を失うことになる。然るに儒家思想における「仁」の思想は人間の原点であり、「仁」の思想こそ現代教育活性化のため内在させるべきものと論じた。また、中国人の根底に流れる儒家思想の天人合一思想も急激な科学技術・工業化が進む中国に於いては人間と自然とを連結させる意味で失うべきではない思想であった。更に『論語』に示された啓発教育、個性重視の因材施教も全体性と総合性とを育成する上で欠かせないものであると結論付けた。

はじめに

本稿を為すには多くの困難を乗り越えねばならなかった。それは執筆両者の日本人と中国人の教育観の差異、両者の研究分野の違い、研究手法の違い等々である。

戦後の日本人は戦前の儒教理念を払拭し教育の機会均等を基本理念にした教育観を確立した。私自身もそうした理念に立脚した儒教研究であるのに対し、中国人の儒教観は嘗て中国的停滞を生んだ負の観念に立脚し、儒教否定の立場に立っている。また中国的教育観を論ずるにしても政治・経済・科学技術との関係を抜きにして教育を論じることが不可能であり、故に儒教及び教育を論ずることは勢い政治論・経済論・科学技術論と取り組まねばならないのである。

両者の研究分野は瀬尾が先秦儒学を専門としているのに対し、辺女史が比較文化の専門家という研究分野の差異、更に中国教育が現代中国の抱える総ての課題を包含しているため伝統教育と現代教育との切り口を何処に求めるかが大き

な課題となった。

しかし、両者は幸いにも儒家教育論に見識を有する辺女史の提議した題目に従い、中国教育の根幹である伝統的儒家文化を基にした現代中国教育論を展開することで合意した。

一 中国伝統教育と現代教育

1 儒家思想と教育

中国古代教育思想を代表する儒家思想は先秦時代の孔子によって完成し、漢代の董仲舒が儒教を国教化したことにより学問の主流となつていった。中国教育は政治と教育が未分化であり、経済との関係は利軽視の教育を行い、後代に至ると地主に対しては租税の強化も行った。則ち教育・政治・倫理・経済が一体化されていった。孟子も「諸侯の宝は三あり、土地、人民、政事」（尽心下）とした。主権と政事の主体は諸侯であり、人民は国家の構成員である。しかし、孟子は「民を貴となし、社稷これに次ぎ、君を軽しとなす」（尽心下）「その民を弔ふこと時雨の降るが若し」（梁恵王下）「民を視ること傷むが如し」（離婁下）等と恣意的ではあるが民を尊ぶ貴民思想を認めることができる。

孔子は殷代の「学」、周代の「辟雍」、魯の「洋宮」等の貴族の専有物であった貴族の学問を庶民に開放した最初の思想家である。孔子は「教えありて類なし」（『論語』衛霊公）と教育に差はあるが教育を受ける者には地位・貧富等の差は存在しないと「束脩を行うより以上は吾未だ嘗て誨うることなくんばあらず」（『論語』述而）と干し肉一束を持参すれば誰でも教育を受ける機会を与えた。それは礼を基本としながらも社会で応用できる能力を育成しようとする現実重視の学問であり、知情意の調和を目指した全人格教育であった。孔子は知情意が觀念論に墮してしまふこ

とを危惧し、自己完成を目指す主体を「勇」と「忠恕」という二律背反の実践によって補完したのである。

漢代に至ると董仲舒の出現により儒学が近世に至るまで中国における学問の正統を占めるようになった。董仲舒は『大学』の明明徳、親民、止至善のいわゆる「三綱領」と格物、致知、誠意、正心、修身、齊家、治國、平天下の「八条目」を基に君臣論、父子論、夫婦論を展開したが、その結果人間道徳が国家体制の中に組み込まれて行くことになった。

儒家の基本概念は倫理道徳にある。この倫理道徳を基本に据え道徳の実践者である人間自身を取り巻く社会を考えることにより、その意味概念を把握していったのである。即ち、儒家の倫理道徳とは社会と道徳を分離し、それぞれの意味概念を攻究することは無かったのである。

道徳概念の最初の提唱者は孔子である。孔子は礼と徳を体した人間が「治國平天下」へ至ると唱導した。「その身正しくば、政に従うに於いてか何か有らん、その身を正しくすること能はざれば人を正しくすること如何せん」（『論語』子路）と孔子は自分自身が徳を体し正しい方向に進むならば政治を行うことぐらい何でも無いのである。逆に、自分自身に徳を体することが出来なければ人を正すことさえも出来ないと言っているのである。

ここに古代中国社会における道徳と政治・社会との未分化を見ることが出来る。「これを道びくに政をもつてし、これに齊ふるに刑をもつてすれば、民免れて恥ずること無し、これを道びくに徳をもつてし、これを齊ふるに礼をもつてすれば、恥あり且つ格し」（『論語』為政）と人は法令等の政治で導いたり、刑罰等で誘導したならば人々は法律の網を逃れても恥じることが無いが、徳治政治で導き礼で誘導したならば人々は恥入り、その上正しくなると言うのである（古注釈に依る）。ここでは「政治」と「刑」、「礼」と「徳」、「政治」と「徳」、「礼」と「刑」との関係が明示されている。礼と徳との実践こそが「治國平天下」への近道なのである。しかし、ここでは厳格な法治主義を否定し、人間の善性による人格主義・徳治主義が強調されている。人格主義は法治主義より強い自己自身に矜持心が要求される

だけに厳しい思想であると言えるであろう。だが「その身正しければ令せずして行はれ、その身正からざれば、令すとも従はず」（『論語』子路）の一節は徳を体得する重要さと共に、法律の効能をも否定はしていない。正名論の延長上に為された議論であるが「礼楽興こらざれば則ち刑罰中らず、刑罰中らざれば則ち民手足を措く所なし」（『論語』子路）は儀礼や音楽が盛んにならなければ刑罰も的確に運用することも出来ず、刑罰が的確に運用されなければ人々は不安になり手足の置き所もなくなると言うのである。以上の章句は孔子が法の効能を全面的に否定したものでない事が窺われると共に、自分自身を律する事のできる君子にして初めて的確な法を行ずる事ができるというのである。

孟子は孔子の矜持心を更に発展させ内省化している。「人を愛して親しまれずんば、その仁に反れ、人を治めて治められずんば、その智に反れ、人に礼して答へられずんば、その敬に反れ、行いひて得ざる者有らば、皆諸れを己に反求す、その身正しければ天下これに帰す」（『孟子』離婁上）は人に対し愛・治・礼等の行為を行っても何らの反応が無いときは人を怨むことなく、その原因を自己に求めよと言うのである。本章は孟子の対話の相手が君主であるが、君主の厳しい自己内省化があつて初めて「平天下」に向かうというのである。孟子の自己内省論は君主主体の自己修養論ではあるが、君主への教育論であり貴民思想の表出である。

儒家教育を人性論の面から考察するとその教育目的は前述した君主教育や人間教育によつて社会の発展や存続を維持することにあり、具体的には「本天道以立人道、立人徳以合天徳」「聯属家国天下而為一體」「為仁為体、以智為用」の三項目に分類することが出来るであろう。第一項目は伝統教育の目標は「天人合徳」による理想的な君主の育成であり、第二項目は伝統教育の成果により大我と転じた生命空間が家・国家・天下と一体になることであり、第三項目は「仁智」兼備の人材を育成することを述べたのである。

儒家教育の中心思想は仁であり、それは自己責任における人格の完成を意味し、自己の人格完成を待つて「齊家」が実現できるのである。社会も国家も構成の基本は「家」である。「齊家」が実現できて初めて「治国」「平天下」が可

能となるのである。家を支える重要な視点は『論語』学而篇に説かれる「弟子、入りては則ち孝、出ては則ち悌、謹しみて信あり、汎く衆を愛して仁に親しみ、行いて余力あらば、則ちもつて文を学ぶ」に見られるように家庭では孝行を行い、家の外では悌順にすべきであるという「孝悌」のことである。これは自己と国家とを結びつける重要な理念である。また、顔淵が孔子に仁の実践方法を質問したが夫子は我が身を慎み礼の基本に戻るのが仁であると答えた。この「克己復礼」に励むことが天下の人々をして自然にその人徳に帰服させ「齊家」「治国」「平天下」に至らせることができるのである。

2 伝統教育と現代教育

教育の現代化を実現する事は、現在の教育を改革し、更に発展させる意味でも重要課題である。しかし、中国の教育の現代化とは中国の伝統的文化と風土に根ざした、中国人に適合した教育改革でなければならない。則ち、中国の特徴を備えた教育とは中国民族固有の特性を保持し続けた教育のことである。中国固有の民族文化を離れた教育とは、世界の教育が国際化に向かう趨勢の中で、他人の後について付かず離れず歩くようなもので独自性を発揮することもなく、発展もなく旧習を堅持し続けるような教育のことである。中国数千年の伝統文化は中国が現代化に向かう中に内包されるべきもので、これは中国の教育が現代化に突き進む上でも強力なエネルギー源となるものである。現代科学技術と現代経済の発展の進展に応じ、現代教育が中国の文化的基礎として発展していくという構図は中国教育が前述二項に対し重要な役割を果たしているという証明である。

但し教育の現代化には仁や智の概念を内在させる必要がある。教育も多くの見方が在るがどの様な見方であれ、教育は現代的な生産と科学技術と、現代の経済の発展に適合しなければならぬ。しかし教育の現代化とは体制や構造、内容だけを現代化するのではなく、最も重要なのは教育観を現代化することである。則ち、教育改革を行うのは人であり

教育そのものを実践するのをもまた人である。この「人」という視点を失うことのない教育観を自立する必要がある。以上述べた人という概念にこそ仁が集約されていると言えるであろう。この視点を失うと画竜点睛を欠き真の教育の現代化とは言えなくなってしまう。

仁とは人と人との交流の中に確立すべき忠恕の心である。武内義雄氏は「孔子の道は仁であつて仁を完成するため忠恕の法を教えられたが、孟子もまた孔子の説をうけついで『強恕して行ふ、仁を求むるこれより近きはなし』と論じた。仁確立のために忠恕の実践が必要なのである。それは人間自身の心の中に、人間と人間の中にあつて、自ら確立していくべきものである。忠恕こそ人間完成の方途なのである。

教育の現代化とは個性の伸長を期待することであるが、個性が自由や利己主義にはき違えられたりしてはならない。この一点において儒家文化の伝統教育と現代教育との撞着は回避され益々伝統教育の意義と価値が十分に發揮されるのである。

二 天人合一思想と現代的価値

原始儒家思想である孔子の学は個人の道德修養を唱導したように個意識の確立が重要視された。しかし、君主学を説く孟子を経て漢代に至り儒教国教化の成立を見ると原始儒家の唱導した個の確立は集団の中の個意識に埋没していった。建前上個意識の主張は見られたが、その根本とするところは集団の中の個意識であつた。嘗ては個の実践項目であつた「礼に非ざれば視ることなかれ、礼に非ざれば聴くことなかれ、礼に非ざれば言うことなかれ、礼に非ざれば動くことなかれ」（『論語』顔淵）の「視」「聴」「言」は総て集团的価値優先の「礼」へと変質した「礼」の実践項目に帰属

するものとなった。

天人合一思想とは「天徳合一」「知行合一」「和を以て貴しと為す」の概念等とも同一線上に位置しながら発展したものである。儒家による天概念の強調は個性を埋没させる様に思えるが、個人の自主性・独立性も捨て去ることはなかった。天思想を基本として政権王朝の理論擁護の働きもしたが、その理想主義の故に現王朝を批判する働きもしたため指導性と権威とを失うことはなかった。天人合一思想は後代、人間と自然との調和とを考える上で大きな手掛かりを与えるものとなった。その思想は「合」「和」の精神が基本にあるからである。

「合一」の概念は当初易の爻辞伝に見えたが、その後老子により確立された。儒家においては『中庸』が天命と人性・天道と人道との合一を提唱したのを受け、孟子が「その心を尽くす者はその性を知るなり、その性を知れば則ち天を知る、その心を存し、その性を養ふは天に事ふる所以なり、夭寿貳はず、身を修めてもってこれを俟つは、命を立つる所以なり」（尽心上）と『中庸』の「天人合一」論を継承し発展させた。孟子のこの章句は後代「人事を尽くして天命を待つ」に変化してゆくが、全人格を投入し燃え尽きた後に達し得た「安心立命」の境地は儒家的に言えば天人合一であり、道家的に言えば根源への悟達と言えるであろう。道家は「人と天とは一なり」（『莊子』外篇山木）と天人合一を説いている。孟子は「昔、堯、舜を天に薦めて天これを受く、これを民に暴して民これを受く、故に曰く、天言はず、行と事とをもつてこれを示すのみ」（万章上）、「天の視るは我が民の視るに自ひ、天の聴くは我が民の聴くに自ふ」（万章上）の両章の堯と天との関係や「これを民に暴して」「天の視るは我が民の視るに自ひ」等は天と人が対峙している。天と人が同位置にいる。但し、莊子ほど表現が直截的ではない。孟子においては政治の対象としての人であり民であるからである。内野熊一郎氏は「舜を民の上に置いてみている仕事させたところ民は舜の行う所を喜び天子とする事を受け入れた」と解釈しているが、それは民が天の推薦する舜を受け入れたが故に則ち民が天に随順したが故に天と民との一体感が生じたと解釈し直すことが出来る。

儒家の天人合一思想は個意識から集団意識確立へと変化を生じさせ、更に人間と自然との関係にまで思いを至らせた。則ち天人合一思想は人間と自然との調和という点において大きな貢献をした。「一」という概念の基に人々は分析性より調和を重視したのである。近代工業革命における工業技術の急激な発展は人類が自然界を破壊しながら発展するという負の面を持ってしまった。西洋文化と教育はこの双方が相まって発展してきた。こうした事態を重く見た西洋の思想家達は教育の中に人と自然との共生を提議する者も出現したが、人と自然との共生思想は人類が未来永劫に発展していく上で最も重要な価値観である。

中国における教育の現代化は嘗ての伝統文化、則ち天人合一思想が「一」の側面を強調し、主体的価値を社会的価値を実現するための集団意識に吸収してしまうという負の側面を帯びてしまった。その結果分析性を排除してしまい科学的思想を退化させてしまったが、天人合一思想は人間と人間の共存に不可欠な平和的価値を保有するものである。中国教育の現代化に必要なのは天人合一の正の側面、つまり人と自然との共生の思想を確立した後、道徳的發展と科学的知識修得のための新しい教育観を樹立することである。

三 道徳重視思想の現代的意義

現代社会はその發展とともに青年達の道徳観の喪失、犯罪の増加、無関心、無責任、労働意欲の低下等が顕著になってきた。これは世界的に道徳教育を軽視した結果生じたものである。中国教育の現代化は他山の石に習い嘗て、世界各国が経てきた経験の基に道徳重視の姿勢を放棄してはいけないのである。

中国教育の根幹は道徳教育であった。道徳教育の成果が「礼儀の邦」としての評価を勝ち得たのである。道徳は人の

持つ才能と共に人が社会・政治等の諸活動において自己実現の重要な主体的価値を占めるものである。

孔子は「礼に非ざれば視ることなかれ」と説いたが、孔子の礼による倫理道徳が絶対化され人間の行動原理を道徳的価値の中に収束していった。更に、後代に至ると孔子の道徳的価値は強固な社会規範となつていった。

孔子の道徳的価値観は行動と内省の両面を保有している。道徳的であるだけに本来具有する内省化の傾向は否定できないが「鳥獸は與に群を同じくすべからず、吾この人の徒と與にするに非ずして誰と與にかせん、天下道あらば丘與に易へざるなり」（『論語』微子）に至つては孔子の社会変革への積極的な関わりを見ることが出来る。孔子はこの無道極まりない世の中であつて、誰がこの世の中を変革しようというのだろうか。誰もそれを実践している人などいないのではないか。人として生まれた以上世の乱れに責任を感じる者にとっては鳥獸等と共に群を同じくすること等はできないのである。世を逃れて一人身を清くすること等到底できないのである。もし天下に道があるならばこの世の中を変革する必要などないのであるからと、敢えて道も礼も廢れてしまった現実社会に積極的に打ち出ようとしている。孔子の説く道に自己修養の範圍を出て社会と政治に拘わろうとする意志が見える。

中国の伝統文化は道徳が中心であるため、一面では偏端な教育であるかも知れない。しかし、伝統のない現代化は意味のないものである。従来、伝統文化と現代化の撞着が懸念されているが中国においては伝統文化と現代化とは対立しないのである。中国における伝統文化と現代化とは融合の關係にある。則ち中国が推進している科学技術教育と伝統文化との關係は内に道徳心の高い精神性を有し外に最新技術を帶した融合の文化なのである。内に秘めた伝統文化に根ざしながらも、その伝統文化を現代化によつて活かしていくのである。そして、現代においても道徳的価値観は社会で活躍する人物に要求される主要な要素であるため、伝統的な旧弊を有する道徳価値観に就いては具体的な分析を加え、伝統教育の優れたところを継承し、現代人の精神文明の成果を基礎としながら中国教育の現代化を確立していくべきなのである。

四 中国人の科学性と科学教育

中国伝統教育の最大の弊害は人文主義の重視に伴う、科学の軽視と權威の重用にある。科学技術は古代社会においても多くの成果を治めた。しかし、その大部分は道德世界に占有されその後の飛躍を見なかった。科学技術に分野における唯一の救いは、伝統思想の中に中国文化が八方塞がりの状態に陥ったときのみ、必要の状況に応じて旧弊を打破し新技術へと転換を図る伝統的自立性だけが堅持されたということである。

中国古代科学の成果には様々なものがある。代表的なものには占星術がある。天を最高の道德規範とする中国伝統思想が天の意志を窺うために天体現象の觀察を行うもであった。これと並行して殷代から行われていた曆法は天文学の水準の高さを証明するものであり、更に、指南車や火砲の發明や陰陽五行における數理的思考の發生は当時の科学技術水準の高さを証明するものである。また、司馬遷は『史記』において医者である扁鵲が祈禱的治療を行う巫医を排斥し合理的医療を強調する場面を描いている。

嘗て中国が高度な科学技術を生んだにも拘わらず科学發展の停滞した国になってしまった原因を藪内清氏は「中国社会が外部からの刺激から遮断されていたこと」にあるとし「中国では科挙の制度が科学の進歩を妨げる一因となつたことは事実である。役人となって立身出世するには、古典を学ぶ以外に方法がなかった。自然科学や技術の研究をやつても、それを社会的に生かす道はほとんどなかった」とし国外からの科学技術の影響不足と古典重視の科挙の弊害を述べている。そして「科挙の制度は科学に背を向けてきた中国社会の生んだもので、窮極的にはこの制度を存続させた中国社会の停滞性に原因が求められねばならぬであろう」と指摘している。更に、人間と思想との關係について論ず

るならば、森三樹三郎氏は中国人は得意の時は儒家となり失意の時は道家となると規定しながらも、結論的には中国人に運命随順の思想が根底を貫いているとする。その根拠を『論語』の「知天命」や『孟子』の「君子は法を行なひて以て命を俟つ」（尽、心下）等の「人事を尽くして天命を待つ思想」と道家の「無為自然」（森氏は運命と同意義に捉えている）の思想、つまり、運命に随順する事により運命の支配を逃れることとの説を引用し、両説の中に運命随順の思想を見出し、両思想は根底において共通するとしている。

現代教育と科学教育との発展は密接な関係にあり、教育現場において現代科学教育を強化することは現代中国においては重要な課題である。また、科学的知識の教育により中国経済を進展させ国際競争力をつけさせ「科教興国」として人民を一步前進させるべき新しい教育観を確立することは更に緊急重要課題である。それには民主的教育を強化し、一方では学生の知的探求精神を沸き立たせ、更にもう一方では教師陣が学生の主体性と創造性を尊重しなければならない。この観点は孔子の「当仁不讓于師」（『論語』衛靈公）の教育観に基づき応用発展させるべきものである。

五 入試教育の弊害と全体教育

入試を勝ち取り功名を得るという学習観は中国にとっては根深く、そのため人間には全体的な発展が不可欠であるという事と入試教育で育成された人間が教育と社会との発展に適合出来ないという点を見逃してしまった。

旧来の「読書作官」による価値観は中国の教育に対する価値選択や入試教育に対し大きな影響を与えた。科挙制度は庶民に教育を受けさせ、社会的地位を得る機会を大きく増やした。嘗てそれが中国人における理想的人生であると考え

られていた。従来門閥貴族の専有物であった知識が解放され人々にとって書を読むことにより、官僚になれるというこ
とは人々を教育的関心へ向けさせる大きな原動力となった。また、門閥制度を打破し、門閥制の非世襲制に多大な効果
があった。それは旧勢力の放逐を新興勢力との交替劇をも意味していた。科挙制度の成功は教育への依存ともなり、教
育重視への起爆剤へとなっていった。しかし、その弊害は種々論議されるどころだが十年寒窓一朝出名は官重視の制度
を生むことになった。

科挙試験に適應できる能力とは膨大な量の四書五経と注釈とを習得する能力、詩文を巧みに表現できる能力を持った
人間のみが合格できたのである。その選択方法はあくまで落とすことが主眼であった。現代教育の改革の重要な点は科
挙時代に要求された知識偏重主義であつてはならないのである。嘗ての「憤せずんば啓せず、排せずんば発せず、一隅
を挙げて三隅を反せざれば則ち復たせざるなり」（『論語』述而）等に見られる様な啓発主義が大切である。啓発とは
教師が教育活動の中にあつて学生の学習と積極性を引き出すためのものであり「一を聞いて十を知」（『論語』公冶
長）らしめるための触発作業である。

調和ある人間性を育成する教育を積極的に推進することは教育改革の上で重要なことである。現代の教育の上で重要
なことは道徳・知識・身体・心の円満な発達を遂げた人格と全体性と専門性を兼ね備えた総合的な能力の人間を育成す
ることである。

六 儒家教学の現代的意味

儒家教学は歴代教育家の精神の継承と絶えざる実践とにより完成したのである。その手法は、数千年来に亘る教学の

実践により客観的に確立されたものである。教育の現代化に直面した今日、人々は更なる多くの知識と技能の修得が必要とされ、有効に素早く多くの知識を修得したいと考えているが、それには更に多くの伝統の教と学とを修得する必要がある。取り分け大いに個性化教育が提唱されている今日、儒家思想の「因材施教」の教学的方法は多くの現代的意義を具有している。頭脳開発重視の教育により人口が資源が知力資源へと変化しようとしている現代中国にあって、伝統文化の「啓発」「誘導」教育は現代社会において更なる実践的意義を持っている。そして、これらの伝統的教學は新世紀の教育にあって新しい方途を呈示しているのである。

注

- (1) 「学べば禄その中に在り」(『論語』衛靈公)、「子曰はく、詩三百を誦し、これに授くるに政をもつて達せず、四方に使用しても専り対ふること能はざれば多しといへども亦た筭をもつて為さん」(『論語』子路)
- (2) 知については「これを知るをこれを知ると為し、知らざるを知らずと為せ、これ知るなり」(『論語』為政)、情については「樂はそれ知るべきのみ、始めて作すに翕如たり、これを従ちて純如たり、皦如たり、繹如たり」(『論語』八佾)、意については「その人と為りや、憤りを発して食を忘れ、樂しみてもつて憂いを忘れ、老いの将に至らんとするを知らざるのみ」(『論語』述而)を例証している。
- (3) 「顔淵、仁を問う、子曰く、己を克めて礼に復るを仁と為す」(『論語』顔淵)
- (4) 『中国思想史』(岩波書店・一九五七年九月)
- (5) 『新釈漢文大系第四卷 孟子』(明治書院・昭和三十七年六月)

(6) 「中国科学思想」(『東洋思想講座第三卷 東洋的人間像』・至文堂・昭和三十四年十一月)

(7) 『上代より漢代に至る性命観の展開』(創文社・昭和六十二年十月)

また、同氏の間人風土から論じたものに「自然への随順の生活が、中国の農民に運命随順の思想を教えた。それは農民ばかりでなく、中国民族の思想となって成長した。中国語の没法子という言葉が独特のひびきを、もつことは、よく知られている。天命のままに生きよ、あたえられた運命に従えという忍従の思想は、後退への道になるどころか、明日への前進の動力となったのである。」(『中国思想史(上)』・第三文明社・一九七八年五月)との論もある。

参考文献

- 一 顧明遠『民族文化と伝統と教育現代化』(北京師範大学出版社・一九九八年九月)
- 二 田広林『中国伝統文化と概論』(高等教育出版社・一九九九年六月)
- 三 王炳小『中国伝統教育』(中南工業大学出版社・一九九九年十二月)
- 四 張錫勤『中国伝統道德拳要』(黒竜江教育出版社・一九九六年五月)
- 五 劉周堂『前期儒家文化研究』(広西師範大学出版社・一九九八年三月)
- 六 鄒昌林『中国礼文化』(社会科学文献出版社・二〇〇〇年五月)
- 七 王興康『論語―仁者の教誨』(上海古籍出版社・一九九七年八月)
- 八 宮崎一定『科挙』(中公新書)(中央公論社・昭和五十五年十一月)
- 九 金谷治『金谷治中国思想論集』上(平河出版社・一九九七年五月)、中(一九九七年七月)、下(一九九七年九月)